詩編 73 編の黙想（2022 年 0 7 月 20 日東福岡教会祈祷会奨励　松見俊）

心の清い人：主なる神を一心に見る人

「心の清い人」（バーラル）とはどのような人か(1 節)？　1 節では、「イスラエル」と対句となっていることからも推測できるように「バーラル」とは「選ばれた者」という意味であり、「分離されたもの」が元々の意味である。そこから「選ばれたもの」、「清いもの」、「吟味され、立証されたもの」を意味するようになった。主イエスは「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。」と言われた。仙川教会時代ある女子大生（清泉女子大学）が言った言葉が印象に残った。「自分は神を見たことがない。だから、自分は心の清い者ではない」。私の目からはそれほど信仰深いと思っていなかった女性であったが、このように聖書を読む人に驚いた。心の清い人とは単なる純心無垢（pure）というより、「一心に神を見ている人」ではないだろうか。ちなみに、13 節の「心を清く保ち」は「洗って清くしようとした」ということで、その努力は「むなしかった」と告白している。人間の理性・知性、経験知では信仰に到達できないのである。「啓蒙主義」は万事、理性、知性で物事を考える点で、結構「世には受ける」のであるが、大きな問題を孕んでいるわけである。

本編から 89 編までが詩編第三巻である。頭書の「アサフ」はダビデ時代のレビ人であり、エルサレム神殿で音楽を司った三名の中の一人であり、すでに、50 編に登場したが、73－83 編にこの名が登場している。アサフの「讃美歌集」があったのだろうか。

１．神から目を離す

人は神から目を離すと、この世界の不条理と理不尽さ、不公平感に囚われてしまう。人の道徳・倫理的善悪と幸（繁栄）・不幸とは一致していない。これは「ヨブ記」の基本テーマであり、神を信じる人間を悩ませてきた問いである。昔「悪い奴ほど良く眠る」という映画があったが、神に逆らう者、傲慢な者が、この世では安穏、安泰（シャローム）で、苦しみを知らず、身体も太っている。金を儲け、蓄財している。あまり労苦せず、病気にもならず、他者に対して悪だくみを考え、災いをもたらし、暴力を振るう。脂肪で膨れた顔の中にある目は不敵に輝いている。彼ら彼女らは「口を天に逆らって」開き、その舌は地を舐めるように働き、「神は見ておらず、知らない」と嘯く。10 節の意味は不明。「民が飲むべき水を彼らがすべて飲んでしまう？」他方、信仰者である自分は「病に打たれ、懲らしめ（苦難）を受けている。」と感じている。しかし、これらの外見は決して「究極的なこと」ではないのである。神から目を離すと、悪者の繁栄への「嫉妬」やこのような不条理、不公平感に囚われてしまい、自分自身に躓いてしまう。これが心の清くない人ではないだろうか！15 節もだれの言葉か分かりにくいが、悪い者らの繁栄を見て嘆くなら、信仰の指導者である自分は信仰の子孫たちを裏切ることになってしまうだろうというような意味だろうか？

２．この世の繁栄は束の間である

しかし、神に逆らい、この世で安泰と栄華を楽しむように見える人々の繁栄は一時的であり、道で滑ったり、迷ったり、一瞬で荒廃に突き落とされ、災難で滅ぼし尽くされてしまう。「栄枯盛衰」の世界である！

3. 神に対して、獣のようにふるまっていた！

自分の病や労苦に対して、神に逆らう者が栄えるのを見て、詩人は、「心が騒ぎ、はらわたが裂ける思いである」と言い、神に向かって吠え、喚き、まさに「獣のように」ふるまっていたと回顧している。あるいは信仰の「悟りの心」を失った「獣」というような意味か？

４．神は「右の手を取ってくださる」

決定的転換点は、17 節にあるように神の「聖所」において礼拝し、神の子ら、信仰の仲間のことを考えたからである。(15 節)。そして、このように心が揺らぐ信仰者を神は「右の手」（利き手）を取って下さり、引き上げて下さる。それゆえ、「常にわたしは御もとにとどまることがでる。」と神への信頼を告白している。「この地上での生で、まだ見ぬ神を愛していないなら、天でだれがわたしを助けてくれようか！」と考え、天と地の狭間で生きる信仰者は、肉として朽ち逝くかも知れないが、「わたしの身体と魂は衰えるかもしれないが（この「にもかかわらず」の転換が信仰なのである！)、神は「わたしの心の岩、わたしに与えられた分」である（26 節）と見定める。この世の人の繁栄は神の裁きと死ぬべき人間の有限性から見ると、一時的である。しかし、神が岩であり、持ち分（嗣業）であることは「とこしえに」そうなのである。

５．神に信頼することこそ良いことである

この詩の最初の言葉は「神はまことに善である」である。28 節にも同じ「善である」が登場する。神に逆らう者がいかに栄え、この世がいかに不条理・理不尽に見えても「神は善なのである」。この神に「近くあること」こそ、また、「主なる神」に避けどころを置く（信頼を置く）人こそが幸いであると告白している。古来より、信仰の人は格闘の人である。